

②1 歳日摺

春を得し市のもとりや年のうち
 懸乞かけこいに句を聞れけり草の庵
 豆打まめうちのさし直しけり床の花
 年や今朝にもしたし夜もをし、
 みえて居る春をあつかる柳かな
 小原へのたよりも年のなこりかな
 もてはやすとしやなしみの穂長うり
 月花の世なみもうかふ岡見かな
 す、はきや庵はとし／＼人まかせ
 浴ゆあみして寐ねまるはかりの師走かな
 人の老うらやみつ、も年をしむ
 かそへ日を山家は宵寝あさねかな
 春をまつこ、ろ庭木にうつりけり
 世はせはし行はかへりて年の波
 行先にあるかとはかりとしの関
 よい先へうられる馬や年のくれ
 春をまつ鳥の夜燭やじやくや雪明り
 庭木まで春の来にけりとしの内
 松明たいまつふりて下りる干潟せんせつや除夜の海
 箔打はくうちの夜ふかす音にとしのくれ
 年波やかへりしあとに心つく
 年木つむ軒のきや朝からよい日和
 わか庵あなや宵から寐ねるを年わすれ
 行燈あんどんを真中まなかにして餅もちむしろ
 節季せきせう候ごうやとなりもたぬ家に来る
 鯨じようまでをとらせてありとしの市
 買ったればさしてくれけり柳うり
 餅花もちばなの影かげにきやかな焚火たきかな
 月あらは猶なほ寝ねられまし除夜の空
 水に顔かほあらふてもとる岡見かな
 かさね着の長しみしかし年男
 世のさまを見に出はやな大三十日おほみそか
 買う人の声は聞えずとしの市
 庵すずの煤日すすび和まかせにはらひけり
 臘ろう八はちや年に稀まれなる山日和
 月のある事をわする、師走かな

蓬 宇 鳥 谷 九 起 抱 義 好 以 淡 節 祭 魚 月 杵 氷 壺 葱 玉 完 鷗 甘 茶 涼 花 一 宣 御 風 赤 甫 積 翠 一 龜 逸 史 不 染 苳 磨 喜 年 弘 湖 几 藤 慶 里 鶴 叟 契 史 婦 牛 唼 風 久 栄 五 鳳 野 井 鱗 三 可 尊 三 徑

行年のいとまや梅を嗅かて見る
 大三十日書院はつねの活火かつかかな
 詔ちからのある足とりや葉竹うり
 掛かとりの膝ひざにも来るや庵の猫
 日や月や行かふ中のとしの暮

鷗波書 ①

秋 夢 花 海 拾 山 公 成 清 民

名残とて雪も降なり大三十日
 何ひとつなす業もなく年忘
 節季せきせう候ごうの見かへり行や己かかけ
 眠る鶴師走のさまを放れけり
 年木つむ門のけふとも成にけり
 夕空や柳のほかほとしの内
 寺町やよその師走を立はなし
 松竹を一はん筆やとしの市
 うれ残るものひとつなし年の市
 峰々の雪も散らすか除夜の鐘
 捨た世を世かすてさせす大晦日
 おもしろく通り過たりとしの関
 行年はゆくやゆるりと大いりり
 傘かりによりてゆる／＼年わすれ
 三尺の庭に春まつ住居かな
 餅花もちばなやをさなく見ゆる枝くほり
 春ちかくなるや炭火の匂ひまで
 馬駕まがの世話にもならずとしの坂
 年の瀬へ乗こむ春の荷舟かふね哉
 雪浴ゆきよくて切たといふや葉竹売
 年の瀬も安しこ、ろの楫かじひとつ

辛酉春

圭岳道人写

印

多代女 為 山 一 清 溪 斎 新 甫 菊 雄 巢 欣 雲 底 旭 齋 董 坡 祐 之 草 波 薰 岱 黙 池 波 同 梅 裡 龍 湖 逸 測 二 鷗 半 夢 芳 草